

さざなみ 国語教室

さざなみ国語教室

第519号 2025年 6月25日

発行者代表 吉 永 幸 司

連絡先 大津市柳川2-11-5

TEL 077-522-1008

発行所 滋賀児童文化協会

NPO 現代の教育問題研究所

ことばの学び

森 寿彦

一、本校の低学年教育

「ことば」を学ぶこととして、「身近なものを表すことばを知る」ことでもっていることばを増やす。そして、「楽しかったことをからだやことばで伝えようとすること」を通して、もっていることばをいかして、他者に伝えることの楽しさを実感できることを目指している。

幼小の「なめらか接続」を目指しているため、学びの環境を整え、「生活から立ち上がる学び」を重視している。日常生活において、子どもたちが、ことばを介して他者と関わる中で、多くのことばに触れ、ことばへの意識を高めていく。そして、ことばと向き合い、多様性を認め合い、ことばを楽しむ素地を低学年から培っているところである。

二、「ことば」に立ち止まる

我が校では、「ことば」を学ぶ上で、朝のサークル対話を大切にしている。毎朝、子どもたちが一つの輪になって座り、生活の中で見つけたことや感じたこと、興味をもったことなどを語り合い、聴き合うことを行っている。

十二月のサークル対話での出来事。ある子がお父さんがゆでたまごを電子レンジで温めた際に、卵が爆発してしまった話をした。その中で、「ゆでたまごの黄身が白身から飛び出てしまっていた」と表現した。すると、子どもたちの中から「飛び出すってどんな感じなの？」ということばがあり「飛び出す」について考える

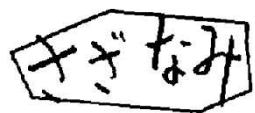
ことになった。普段使っている「飛ぶ」との違いから考える子や「出す」ということばをもとに勢いを感じ、動作化して飛び出すを表現する子など一つのことばに対しての理解を深めようとする姿が見られた。子どもたちにとって曖昧だったことばも友達と共有し合うことで、理解が更新され、一人一人のことばが拡充される。

三、日常の経験から国語の学びへ

ことばに立ち止まり考え合う経験は国語科の学びにも生かされる。「じどう車くらべ」を読んでいるときのこと。ある子が「おもいにもつをのせるトラックには、タイヤがたくさんついているってあるけど、『には』っていうことは他のトラックもあるってことじゃない？」と『には』ということばに立ち止まり、問いを発した。その問いがもとになり、タイヤが普通の自動車と同じ数のトラックがあることや荷物だけではなく、車を運んでいたり、動物を運んでいたりするトラックがあることに気付くきっかけとなった。

四 ことばへの態度

ことばに立ち止まることが当たり前になってくるとことばへの「態度」が高まる。その「態度」が我が校の国語部の研究の一つである。今後も子どもたちの「ことばへの態度」を考えていく。
(お茶の水女子大学附属小学校)



▼芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」の俳句を画像生成AIが作成した画像を『月刊国語教育20638』（日本国語教育学会）において松岡礼子（至学館大）氏が紹介している。数秒で

生成されたAIの画像について松岡氏の論文では「色は深緑を基調とする。構図は霧がたちこめたような薄暗がりの中に日本庭園と思しき背景があり、中央に水しぶきのあがった池があり、一匹の蛙が座っている」とのこと。芭蕉の俳句の静けさと自然の瞬間の響きを感じさせるというものであった▼膨大なデータを学習し、それを基に文章や画像などのコンテンツを新たに作り出してくれる生成AIが作られた「古池や」の画像は、一枚の写真のようなもの。初めは驚いたが、雰囲気の違いに違和感をあつた。しかし、AI活用の仕方として、場面をイメージする、具体的な条件を考えると、授業と子供を思い浮かべると、他の俳句でも試みたいと気持ちが膨らむ▼端末タブレットが学習道具として教室の環境を変えたように生成AIも情報という面で学習支援に役立つことが多くなるだろう。掲載誌の特集は「主知的な書き手を育てるー生成AIと国語科」であったから。好奇心に溢れる子供達はずいぶんじむだろう。しかし、AI頼りにならないように、古池やの画像から得た時の違和感と大事にしたいと思う。
(吉永幸司)

A児の書く姿を目指して

畑中 翔太

自学級にいるA児はとにかく書くことへの苦手意識がつよい。私が、

「では、感想を書きましょう。」
等と一言書くことを促せば、

「なんて書けばいいかわからん。」

「思い浮かばん。」

と氣力を失う。隣で助言しても、なかなか納得がいかないそうので、様々な成果物が積み上がってこない。

支援として、A児と会話をして、A児が言った言葉をそのままノートに書くことがある。これは、自分の言葉が文字になりそれらが連なって文章になっていく過程を体感してもらうためである。

今回、その過程を自分のペースで進められるように、タブレットの音声入力という機能を使ってみることにした。音声入力機能とは、タブレットに直接話しかけ、その音声から言葉や文を読み取りそのまま入力してくれるという機能だ。

A児はおしゃべりであり、いつもたくさんさんの言葉を発信している。それが文になることを体感し、文字化することに慣れてほしいという思いがあった。A児にタブレ

ットを使った作文を提案してみると、

「やってみようかな。」

という、前向きな反応だったので、早速作文の時間にタブレットを用意して操作方法を説明した。作文するにあたって「書き出し」言い換え「話し出し」を確認してから、作文に取り組ませた。

A児は、自らタブレットに向かい、進んで操作しながら話しかける様子だったため、様子を見守ることにした。

僕は6月6日に音楽会をしました。曲は笛星人とドレミの歌とアラムサムサムをしました。笛星人は、リコーダーでタンギングをしました。ドレミの歌は、上パート下パートをしました。アラムサムサムは頑張っておどりました。楽しかったです。

(音声入力のため、三年生がまだ習っていない漢字に変換がされることが多かった)

一行書くのに多くの時間と労力がかかるA児にとって、短時間で五文も作文したことはよい体験だったと思う。今後も、前述した文になる過程を体験することに加え、作文ができたという達成感も大事にしていきたい。

(大津市立田上小学校)

はじめての気持ち

弓削 裕之

学年末に向けて、日頃から作文を書かためている。三月には、書いたものからとっておきを選んで清書をする計画だ。これまでに、遠足と運動会の作文を書いた。八百字ほどの作文用紙で、さっと書いてしまえる分量ではない。それでも、三年一組さんは弱音を吐かない。初めは半分ほど手がとまっていた子も、「ここまで書く」と目標を決めて言葉を探すうちに、一枚書けるようになってきた。「ここまででいいや」では、辿り着かなかったゴールである。

わたしは運動会ではじめての気持ちを知りました。それは閉会式のことです。

こんな書き出しで始まる作文があった。どんな時も笑顔で前向きなAさん。今は一年生に絵本の読み語りをするために、休み時間を使って練習している。運動会の閉会式では、三年生代表で参加賞をもらう役を務めた。

リハーサルの際は練習なので、あまり何も思いませんでした。人前に出るのは大好きなんです、がいざとなるといつも緊張してぐすっと笑ってしまいます。笑うのを

がまんすると、こわい顔になってしまうので、いつもニコニコでがんばっています。わたしは不安になりました。本番で、緊張しすぎてうまくニコニコにできないのじゃないか。わたしはそれから、かみみの前で、ニコニコの練習をするようになりました。

Aさんの笑顔に隠れた気持ちを、驚いた。Aさんのニコニコは、がんばりの証だったのだ。

「学年から一名参加賞を受け取りに出てきてください」とアナウンスが流れました。心の中で(あつ、ついにきた)ときどきしました。「あつ、やばい」と心がひびきました。ですが前に行くคนเดียวではなく他にも数人いたので少しホッとしました。三年生の番がやってくると、また少しなぜか緊張がほぐれてきました。気づいたらニコニコになっていました。受け取るとなぜなのかわからないのはじめての気持ちに出会いました。体は寒いのに心はとてもホカホカでした。

「気づいたら」から、自然とこぼれた笑顔だということがわかる。時折小雨がちらつき、肌寒い中で行われた春の運動会。Aさんにとってホカホカの思い出になってくれてよかった。

(京都女子大学附属小学校)

「島の匂いをする」

少徳 信

初夏のすがすがしい空のもと、フローティングスクールの航海に乗り出した。湖岸ウオークラリーやびわこ学習を通して子どもたちは琵琶湖の魅力を存分に感じていたのだが、そんな種々の活動の中から、とある子ども言葉を紹介したい。

航海二日目の展望活動では、竹生島の近くを航行することになっていた。雲一つない絶好のコンディションだったのもあり、きらめくさざ波の光の中に堂々と浮かぶ竹生島は、何とも言えない存在感を放っていた。そう感じたのは子どもたちも同じだったようで、しばらくの間その雄大な竹生島をゆったりとした表情で眺めていた。そんな中、とある子が「島の匂いをする」と近くにいた友達にそつと伝えるような声で言った。そのつぶやきを耳にした友達もふつと微笑むような表情で答えていた。

「島の匂い」といっても、これが島の匂いだと明確に判別できるものがあるわけではない。では、なぜこの子の中からこのような言

葉が出てきたのだろう。同時乗船した他校の児童だったため普段の学習や生活の様子はわからないが、その子は好奇心が旺盛なようで、その直前のびわこ活動でも熱心に説明を聞いたり実験に見入ったりしていた。私が担当した水のごれ回復実験では、徐々に透き通っていく水の様子をじっと見つめていただけでなく、赤潮やアオコの発生した時期の琵琶湖の写真と今まさにうみのこが走る琵琶湖とを何度も見比べていた子の一人であつたと記憶している。そんな様子から、この子は人一倍センサーがよく働くのだろうと感じた。

そのセンターがとらえた色や風や光や温度が「島の匂い」という言葉に凝縮されていたのだろう。もしかすると、特に友達に伝えようと思つて言つた言葉ではないのかもしれない。それに、この言葉をけを切り取ったとして、この子が感じていたことが伝わる人はそう多くないだろう。それでもあの竹生島を前にした空間と時間を共有した私たちにとって、「島の匂い」は確かに琵琶湖や竹生島を感じる言葉であつた。まさに心と言葉がつながった瞬間だった。

(彦根市立高宮小学校)

社会の問題が解けるには

読書をしよう

川端 由起

読書キャンペーンを5月に全校で行いました。毎年の恒例行事です。今年は4年生を担任していて、自クラスが一番読書をした児童は、522ページも読書しました。

しかし、1か月の間に短い絵本を2冊しか読んでいない児童は、合計40ページです。男子は特に読書をしない傾向にあり、「放課後に何をしているか」と聞くと、運動の習い事、ユーチューブ、任天堂スイッチがほとんどを占めていました。また、アンケートで「1か月に本を何冊読むか」というアンケートでは、学年で4年生は0冊が20人もいました。5年生はその上をいく0冊が50人もいました。

「高学年になると読書をするくなる」とよく言われますが、自身の学校でその現状を目の当たりにして、何とかしなければいけないと感じています。

読書をしなくなると、5年生の社会科の食料生産、工業、貿易、情報産業など文章や図やグラフを読んで理解できなくなります。読書を全然していない私のクラスの児童は、4年生の社会科も理解に苦しいです。

この状況を打開しようと、朝日新聞の「今解き教室」という資料やグラフを見て解答する形式の問題を最近時間があれば朝学習の時間にやっています。最初は「難しい。わからない。」という声が多く聞こえてきましたが、慣れると皆、それなりに解けるようになってきています。

「子どもの読む力を育てよう！」小川三和子さん著作の本で、中学年では読み応えのある絵本を読むことから始めてほしいと書いてありました。また、科学絵本やノンフィクション絵本もおすすめたそうです。子どもたちに大人気のサバイバルシリーズもいいですが、ノンフィクションの絵本の本が、記憶に残り、世界観が広がりそうです。

読書キャンペーンで、4年生が一番多く読書をしていました。できる限り本を読む時間を作りま

す。また「今解き教室」みたいな今の社会を伝える文章も一緒に読み、子ども達の語彙力をあげていきたいです。

(草津市立志津小学校)

すべての子どもの 学びを保障する

〈ぬくもりのある〉

学校創りをめざして

池寄 繁伸

本校の校訓は『みがけ智徳』であり、智徳の二文字には様々な思いや願いが込められている。例えば、「知恵を出し合って、ねばり強く課題を解決していくこと」や「思いやりの心で人とつながっていくこと」など、すべての人が幸せに生きていくために大切にしていきたいことが、この智徳に込められていると考えている。

本校は、誰一人取り残されず、誰もが安心して過すことができ、認め合い・支え合って、共に伸びていける〈ぬくもりのある〉学校を、みんなで創っていくことをめざしている。子どもたちが、安心・安全に充実した学校生活を送っていくためには、保護者や地域等の方々や学校が共に、子どもたちを真ん中にして、当事者として力を合わせていくことが重要である。「対立」ではなく「対話」を大事にしながら、子どもたち・教職員・保護者・地域の方々など、〈みんな〉よりよい河瀬小を創っていきたく願っている。

本校では、「すべての子どもの学びを保障する」「子どもの尊厳

・人格を大切にする」「全職員が教育の専門家として成長する」という三つのビジョンを柱として学校経営を行ってきた。

「学校づくりは学級づくりから、学級づくりは授業づくりから」という合い言葉のもと、すべての子どもの学びを保障するために「きく（聴く・訊く）」を大切にしたい協同的な学びの授業研究を長年行ってきた。研究を積み重ねるなかで、現在では友だちと共に学び合う子どもが増え、学びに向かう学習集団として子どもたちの意欲的な姿が随所に見られるようになってきた。「きく（聴く・訊く）」ことを大切にしたい協同的な学びが、学校文化として根付いてきていることを目の前の子どもたちの事実から実感しているところである。

そこで、今年度の校内研究の主題を『共に学び合う、きき合う集団づくりを目指して』『「書きたーい」「書けそう」と意欲的に学び続ける子どもの育成』と設定した。様々な課題のある本校の子どもにとって、自分の思いや考えを書く場面では学びが止まってしまふことが多いのが現状である。そのため、個々の思考力を高め、自分の思いや考えを書こうとする子どもを育成することをめざして国語科を窓口の研究を行っていく。書くために「書きたい」「書けそう」と思えることが重要である。子どもがそう思えるための活動や

教師の支援を研究するとともに、自分の書いた文章を友達と読み合うなかで、よりよい言葉や文章を書こうとする子どもを育成していきたい。具体的な研究の内容としては、4つの「対話」を取り上げている。

【教材との対話】自分の考えをもつことやその根拠を見つけることを大切にしたい。

【友だちとの対話】友だちの考えや思いを聴いたり自分が分からないうちに訊いたりすることである。自分と友だちの考えの類似点や相違点を見つけることで友だちと対話する楽しさを感じることができるようになっていく。

【教師との対話】教師はファシリテーターとして授業をコーディネートしていく。子ども同士をつなぐいだり全体に問いかけ直したりして子どもたちの学びが深まるようにする。

【自分との対話】自分の考えや思いが変化していることを意識したり気づいたりすることであり、自分の考えをアップデートしたり授業で得た知識を使って再構築したりする機会を作っていく。

また、「書きたい」「書けそう」と意欲的に学ぶために、書くことに抵抗がある子どもにとつて少しでも「書きたい」「書けそう」という思いがもてるような魅力的な課題や相手意識のある課題の設定を、単元を通して行っていく。等

「書くことは考えること」であり、いかに粘り強く思考力を鍛えていくのかが重要であろう。日々コツコツと書くことを習慣化し、書くことを厭わない子どもたちを共に育てていきたいものである。

(彦根市立河瀬小学校)

編集後記

▼5月例会
(五一八回)

混斗さん(日栄小)研究教材は「たんぽぽのちえ」(2年光村図書)▼提案内容は①教材と子供をつなぐことを目的とした初めのお会話をせ方の工夫②順序をキーワードにした段落ごとの読み解き③全体と部分をたぐりあう「たんぽぽのちえ」の理解④学習整理と習得した内容の整理であった。▼授業改善として工夫したことは、それぞれの学習過程における板書とノート(ワイド・クシット)であった。板書を立体的に工夫したことであつた。ノートの工夫は、実際に配慮し、適切な分量を意識したものであつた。つまり、板書は、順序を表す語句をカードで示したり挿し絵と文章を繋ぐことの大事に気が付かせるものであつた。また、ノートは①大事なことや文章を見つけた、書き写すこと②考えたことを文章化するのと③発表のメモとしての役割を持つたせるというものであつた。▼この学習の手引きでは、「見とおしをもつていく」において「たんぽぽがかわつていくじゅんじょに気がつく」をよみましようという導きがある。さらに、文章を読み解く上で「春になると、三日たつと、やがて風の吹く日には、等々の言葉の確認を求める指示がある。つまり、指導内容の「順序」に関わる学習活動の示唆である。井上さんの実践は、これらの学習内容を板書とノートの示したものであつた。

▼巻頭には、森壽彦先生から玉稿を頂きました。深謝。(吉永幸司)